

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
保健学研究科	パブリックヘルス領域

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

(1) まずインドネシアで過ごすことで、インドネシア人がどのように宗教を基本として暮らしているか多くの点を見る事ができた。街中だけでなくガジャマダ大学内の各箇所にお祈りをする場所があり、お祈りの時間になるとあらゆる場所で大音量のお祈りを促す音楽が流れていた。朝4時頃にも音楽で毎朝目が覚め、ムスリムは早起きをして毎日お祈りをしていることが分かった。また、ショッピングモールに行った際にも、トイレの近くに足を清めるスペースと礼拝室があり、前方で男性が後方で女性がお祈りをしていた。店の利用客とともに、勤務中の店員や警備員も一緒にお祈りをしていた。また、食事はどこに行っても豚肉は無く、アルコール飲料を販売している店もほとんど無かった。日本ではめずらしいこういったハラル食や設備が当たり前利用できるということが非常に新鮮に感じた。

次に、プログラムを通して多くの講義を受けた。さまざまな災害についてや、震災時の法医学スタッフの活動やジェンダーなど、幅広い知識を得られた。講義以外にも、フィールドトリップにてムラピ火山の避難地域や津波被害のあったケマダン地区に見学に行った。BPBDの本部を見学し、どのように火山をモニタリングしているのか、また日本の大学や JICA などさまざまな組織の技術協力や支援により成り立っている事を知った。さらに、ハザードマップを見ることで、火山の溶岩が川に沿って早く流れて行く、など火山の被災の特徴を知ることができた。

(2) 災害対策についてグループワークなどを通して自分たちで考える機会が多かった。その際に一人の考えだけでは十分では無く、できるだけ多くの視点から意見を出し合う事でより良いものになるのだと気づいた。私は看護師なので医療者の目線から対策を考える傾向にあるが、他の学生の発想や気づきを聞くことで避難者の視点や避難所運営者の視点などさまざまな視点から考えていく必要があることを学んだ。そこから災害対策において、自分で全てをやらうとするのではなくさまざまな立場にある人達を巻き込んで一緒に考えていくことが重要なのだと考えた。さらに重要なこととして、既に出ている多くの意見をメンバーの意向に沿いながら時間内にまとめられるように、誰かがリーダーシップを取り進めて行くことである。グループワークをする中で、誰もリーダーシップを取ろうとしないような場面もあった。その時に私は、リーダーシップを取ろうと決めた。「これはどうする？次はどうする？」と意見をどんどんメンバーに聞いて行くことで、課題を時間内に終わらせることができた。これまでリーダーシップとは誰かに何かを指示したりと難しいものと思っていた。しかし、必要な情報を次々にメンバーに問い答えを得ることでおのずとメンバーが率先して物事を進めようとする取り組みはじめて、時にはリーダーシップとは意見を引き出すだけで物事を進める事ができるのだと感じ、苦手意識を変える良い機会になったと思う。

(3) 今回のプログラムでは、災害を通してジェンダーや脆弱なグループにも意識を向ける事で皆が平和に暮らせる世界に近づけて行ける事を学んだ。しかし、それと同時に災害対策を考えるに当たって自分を含め大多数が現状復帰への対策を真っ先に挙げており、ジェンダーや脆弱グループへの配慮を常に意識して災害対策を考えるのは非常に難しいものだと感じた。さらに、今回はジェンダーと災害というプログラムの中で考えるものであったためジェンダーや脆弱グループに配慮した意見を出してもメンバーたちが納得してくれたが、実際の災害時にはさまざまな職種や年代の人たちと協議が必要になり、そういった場でジェンダーや脆弱なグループに配慮した案を出した時にプログラムのメンバーたちのように受け入れてもらえるかは不安を感じる。災害対策を通して平和な世界に近づけていくということは理想的な考えではあるが、

実際に実行するとなると恐らく周囲の理解を得るためにかなりの苦労を要するのだろうと感じた。それと同時にそういった苦労をして理解を得るという過程が無ければ、災害対策は原状復帰にとどまり平和な世界に近づけることは永遠にできないのだろうとも感じた。私は、そういった苦労をしてでも平和な世界に近づけて人々が安心して楽に暮らせるよう行動できる人間になりたいと感じた。

- (4) 災害後の避難所の運営についてグループワークで考える機会があった。避難所の部屋をどう使うか考える際に、メンバーが女性の部屋にだけ授乳室、託児室を設けておりメンバーのほとんどが無意識に同意をしていた。その際に、私はジェンダーについて意識しなければいけない事に気づき、男性の部屋にも授乳室、託児室を設ければ育児が女性だけの役割にならず負担感が偏らないように工夫できるのではないかと思ひ提案した。他のメンバーも、今回のグループワークでジェンダーや脆弱なグループへの配慮が必要であることに気づいたようだった。私を含め災害対策の事にばかりに考えが集中してしまい、ついマジョリティを基本とした対策ばかり考えてしまう傾向にあることに気づいた。特に、インドネシアの学生の考えにはイスラム教が背景にあり、宗教の教えの中でも性役割が教えにあるようで、私たち以上に性役割への考え方の意識が特に根強いという印象があった。そのため、そういった部分は他の学生が気づいた時に意見を出していくことで、彼らも自分の持つ強い性役割意識に気づくことができるきっかけにできたのでは無いと思う。以上から、ジェンダーに敏感な災害対策は、①自分たちにはこれまでの人生で無意識に築いてきた性役割への考えがあることをきちんと意識する。②災害対策グループ全員でジェンダーを配慮しながら災害対策を考える事を共通意識として持つ③誰かがジェンダーへの配慮ができるポイントや配慮が足りていないと気づいた際に、遠慮せずに発言しその都度修正ができる。以上が私の考えたジェンダーに敏感な災害対策である。